

## 芥正彦はただものでは終わりそうにない

見逃せない、魅入られる若者劇

——ノイズオペラ「カスパール」(中野テルプシコール、5月5日～10日)

## 山崎春美

かぶりつきで観ようと思っ  
ていた。理屈なんかない、理  
由なんか言ったところでわか  
らんだろ。超満員に詰め込ま  
れた小舎に急遽設えられた最  
前線、いや最前列に並べられ  
た座布団(他公演のチラシと  
かが置かれて客席とわかる)  
の真ん中らへんに迷うことな  
く、どっかと腰を下ろせたま  
では良かったが、いざ開演す  
ると、空間の広さいっぱい使  
って登場者が、その右端と左  
端に別れたまま動くので全体  
を把握するためには常時左右  
を油断なく見張っていなけれ  
ばならなくなった。その構図  
はしかし効果的で、大声を出  
さなければ一方から他方に届  
かないからどうしたって声高  
になるし、加えて、向かって  
左側の体制側三人組が、向か  
って右の主人公に絡むために  
は移動を、靴音ひときわ大き  
く高く、歩幅大股でしかも素  
早く歩かなければ、いっそ間  
延びしてしまう(註1)。今  
回のこの演劇では間延びは言  
語道断である。躊躇、逡巡、  
ためらい、すべて絶対に禁物  
だ。当然と云えば当然だろう  
が、ただ、いま言いたいのは、  
間延びが許されないことがと  
りわけ際立つ性質の劇だとい  
うことである。

その急ぎ方は、激怒し、憤  
った人が掴み掛かろうとして  
詰め寄ったり、突発事故が発  
生し、その緊急事態処理に向  
かう責任者の足取りそのもの  
だ。

たとえば開演一五分前に開

場するのだが、観客が入った  
ときまず目にするのはカスパ  
ーらしき全裸の(胎児型の姿  
勢で我々に背を向けているた  
めたぶん)男が、上手側で鎖に  
繋がれ一人苦しみ呻いている  
姿であり、この間、我々観客と  
カスパールのあいだには、変な  
言い方になるが、時差はない。  
一方、下手側で白の上っ張  
りなど着用に及んでいる研究  
者と思しき女一人男二人の三  
人は、超スロー再生で動いて  
いる。一瞬かた目を離し、た  
またまた知り合いに目礼の  
ひとつもして視線を戻したか  
らってほとんど同じ姿勢だ  
が、他公演のチラシの束から、  
いまもう席に着いて、これか  
ら観ようとするノイズオペラ  
のそれを抜き出して目を遣  
り、再び彼らを見ると位置関  
係が変わっていて、そのたっ  
た数十秒のあいだに「時間が  
過ぎ」彼らと動いている、動  
き続けていたのだとわかる、  
そのような速度で動いてい  
る。さらに定刻に照明が落ち  
て物語がはじまり、そして終  
わりを告げんとする頃になる  
とその彼らはすっかり居眠り  
を決め込んでしまい、しかも  
その事実を打ち消すべく互い  
に気まずそうに知らんぶり  
し、罪をなすりつけあって事  
なきを得ようとする、そこに  
は、くだらないと知りつつも  
あえて悟性を眠らせ感覚を鈍  
磨させることでかろうじて遣  
り繰り算段して生きている  
我々の日常社会がある。劇中  
での彼らの性急さ、矢継ぎ早

にマシンガンのごとく休みな  
く繰り出されるコトバの嵐、  
命令形、根拠ない断定、走る  
ことなく「強歩」での身動きか  
たに「自由さ」は微塵もなく、  
自在な軽やかさは欠片も見当  
たらぬ。例に取れば野次馬  
は、ただ見逃したくない下卑  
た劣態からだけのために走る  
(斯く言うほくとして、生まれて  
このかた何度その「お恥すか  
しい」走り方で走ったりして  
きたことだろうか)。カルト  
漫画(「人間時計」徳南誠一郎)  
に曰く「人間というのは下卑  
た動物なのです」。而して退  
嬰し墮落した倦怠ぶりさえ  
ない現世に住まう、それら無  
意味にして無意義な「リアル」  
には偽物の時計の指針でしか  
生をまっとうできない我々の  
実相がほの透けるのだ。

あらためて、演劇のことな  
らんでまるで知らないし、それ  
こそお芝居なんだ言われた  
ら、もっとずっと、なにひと  
つわからないのに、いや、だ  
からこそなにかしら書きたく  
なる、触れたくって仕方がな  
くなる、そんな芝居にすいぶ  
ん久方に出逢えたと言えるの  
だが、しかし、それがそが演  
劇の、芝居の醍醐味であるし  
また魔力ではないのか。

理由なく不意にときめいた  
り、たった一瞬しか訪なわな  
い外連味が垣間見えたり、醒  
醐味が真骨頂をすべりおいた  
り。意味もなく他愛もない、  
でも内っ側だけのスリルに震  
撼させられたり。  
って、斯くも手放しに絶讃

ばかりあまりすると、あるいは  
は関係者にとっては公演実利  
に尽きたとしても、感想文  
(まさか批評だなんて言わな  
いし言えない)としては最低  
にお粗末な、ただの学生レポ  
ートにも劣ると言われるやも  
知れぬが、なに、構やしない。  
ただか活字じゃねえか、世  
辞じゃなし阿るつもりもな  
い、純粹に一素人客として感  
動を記してただけだ。

死を、いや生でもいい、生死  
を賭してひらかれる「享樂」よ  
りほかに藝術なんてない。文  
化もない。娯楽にもならない。  
古のドイツ人もぬけぬけと  
言ったではないか。「商品と  
は命がけの飛躍である」と。  
US切ったのお笑い四人組……  
とは別人か。中途半端な表  
現ならむしろなくていい。ま  
してとりわけ演劇なんて。烏  
群がましいにも程がある。腹  
ささろくすっぽ括れないな  
ら、まずは身を以て首をくく  
るべきなのだ(註二)。

そしてそしてさらに言え  
ば、ただミーハー的に(芝居  
には伝統的に俄か人気派生  
が必然だとは重々承知してい  
るが)言い募っているわけで  
もない。ひと昔も古い歌謡曲  
にさえ「おもいがけなく歴史  
はさらに深いけれど」(註三)  
と歌われるではないか。

室伏鴻(註四)のメキシコ  
での客死からすべてがはしま  
ったわけでもないしまた、な  
にもかもが彼の、この国では  
無名でも欧州ではひときわ著  
名な、生真面目の行き過ぎた

ひとりの舞踏家の息の途絶  
え、踊り続けてきた型そのま  
まの姿で墨国の空港に臥して  
倒れ生の終焉を迎えた(註五)  
あの日に、いちどきに終わり  
を告げるというものでもな  
い。それら花も嵐も踏み越え  
た地平線を睨み見据え、水平  
にたたらを踏むとき、中野テ  
ルピシコールに於けるこの計  
六日間、全六回に及ぶ、もし  
かして画期的(かどうかは歴  
史しか証明できない、だった  
ら敢えて断言するほうを選ば  
せてくれ)且つ、ささやかな  
れどゆくりなく不意打られた  
愉悅の一夜を味わうことので  
きた我々は、まさしく幸福な  
のである。この一本のオペレ  
ッタに遭遇できた僥倖に我を  
忘れてしまおうとする我々の  
動機の内には、いったいな  
が潜んでいるのか。

おおよそ一ヶ月ほど以前、  
さくらが、もちろん花の名前  
であって、だから花見と称さ  
れる催しを同時に開ける可能  
性もなくもなかったのを、あ  
いにくの降雨が台無しにした  
二〇一八年春のことである  
が、場所はW大学の近辺であ  
り、いつまで続くのか、とに  
もかくにも整然ときっきり棚  
に並べられた人文書、藝術関  
連の書物の山に囲繞されなが  
ら、件のその店(註六)では  
連夜、まるで講義のようにし  
てあたかもアラビアン・ナイ  
トさながらに、でももっとず  
っと真に迫った幾夜かが過ご  
されたもののだが、それに  
したって、そのままでは済ま

されまい伏線が無数に糸吹く蜘蛛の巣ばりに張り巡らされてもいたわけで。

少し焦りすぎた。話はさらに遡らなくてはならないが、横浜での芥と室伏による二人アルトー、丹生谷貴志や『ジュネの奇跡』を著した宇野邦一も居たっけか。今年の一月に『室伏鴻集成』(河出書房新社)の(膨大に遺された手稿の山から)中原蒼一、渡辺喜美子と共に編纂を手がけた鈴木創士はもちろん、今回のハントケ劇の音楽をモジユラー演奏の森田潤とともにすべて現場の即興で音楽を作った佐藤薫(E.P.4、TACO)もそこにいた。「これは若者劇だ」。

そのアルトーは一人ぼっちになってしまい、しかも払わなければならない代償としての奇禍は、その後も幾たびもわれら目がけ爆弾となつてはピンポイントに襲いかかられるのだからまったく、たまつたもんじゃな。

ちがう、そうではない。もっとも別々に、はっきりとあいていた口が、活火山ならばこれが、さぞかしでっかい口ではあつたらう、その山伏ならぬ室伏の手稿の調査に要した歳月、その奇妙に奇天烈で奇怪なる報告に、火蓋も、また臉をも幕と共に切つて落とされる。

なるほどぼくは知らない、演劇にも、なんら興味なかつた。けど二九七八年、阿部薫や灰野敬二が音を出し、右翼の街宣車が絵に描いたみたいで脅しの絵巻物たる威嚇ぶりで街頭で描いてみせた、それは観た。あの時代、「一人の人間の命は地球より重い」と時の総理が獄中にあつた政治犯

(だけに止まらなかつた)を釈放して人質の解放と引き替えにした、超法規的措置(世界中の映画祭から繰り返しお座敷が掛かつて、足立正生監督が出獄、もとい出国できないのは、このときの恨みなんだとか。なんたる狭き視野!)が罷り通る中、この国の、決して鈍色なんかじゃない、単なるただの「鈍さ」「トロさ」が灰雲みたく日々を覆つて、いつ果てるでもなかつた。空気の淀みは色という色を喪つて汚らしく不潔だった。

だったらその「あの頃」から四十年もの幾星月を経た現代は? そう、もっとダメになった。輪をかけて思考する能も術も奪われ、牙には被せが義務付けられ、尊厳は口籠もつては吃りつつも、ただ阿呆面を晒すしかせめても自己表明する手立てを喪い、ただただ非道い。

いま、演劇はまちがいなく死にかけている。むろん幾たりのかの優れた例外を除いてはだが、ほとんど死に瀕している。また、これら肉体勝負にしか活路なき安国……じゃなかつた暗黒演劇にあつてみれば、いやさ、いま一歩踏み込んで言わせて貰えば、この国に限ればすべての演劇が、おそろしく貧弱な、なけなしで単発の「気分」いじりにしか、関心なくやる気なく、それをやれるだけの実力さえ備えていない。臨終間近なこの国の文化には進化論も弁証法も効かない。

可能性が唯一あるとすれば「天才」と「天然」、すなわち突然変異しかない、かねがねから思つてはいた。あれから四十年。「ホモフ

イクタス・メタドラマ計画No.2(知らなんだ)としてやってきた「六十年代からの手紙」シリーズである。と、なれば彼の「三島由紀夫vs東大全共闘」からだといふ半世紀。こんなにも真つ勝負な直球が来るだなんて誰が想像しえたらうか。

ぼくがなにに興奮しているのか、確とおわかりだろうか。もう長きにわたり低迷し霧散し形骸のみと言われ、消滅寸前とされ、凋落の一途にあつた「アングラ演劇」に「待た!」を掛け、原点から立ち上がったのがこの「ノイスオペラ」「カスパー」であり、まぐれ当たりした徒花などでは毛頭なかつた、その魅惑、手応え。まごうことなき「来たるべき演劇」への予感を孕んでは、十二分に次回作を期待させる

と確信できるからこそ、「号外記事」なのだ、この一文は。伝説のカスパー・ハウザーをモデルに六七七年にペーター・ハントケが著した戯曲(翻訳は龍田八百に依る)を芥正彦が演出した。そして、芥と五日目のアフタートークした宮台真司も驚愕していた、弱冠二十歳という天然天才役者、石倉来輝と、一方、人形遣い士にして同時に黒子の被り物を脱いで役者までも演じた結城敬太の、なんとも風変わりなダブルキャスト。上演後トークで芥正彦は、ハントケの分裂症的な側面を人間石倉が、その一方、自閉的な一面を人形遣いの結城が、それぞれ現しているの両方とも観て欲しいと語り、まさしくその自負のままに、今後の更に破天荒な暴れっぷりが期待できる二人を天下に示したのである。ズバリおもしろい!

さらに言うなら、すばらしい舞台だった。

斯くしてノイスオペラ「カスパー」を感激、もとい観劇して帰り道で、一緒に観た娘はこう呟いたものだ。

「芥(正彦)さんって人(才能)が居てくれて、ほんとうに良かった」

絶賛と悪罵が交錯し、ゴミだの石だのと同時に紙吹雪だのおひねりだのが飛び交うべきなのだ、賛否両論が戦わされなければ嘘だ。大向こうにいる不可視の敵と、無念のうち死んでしまった戦友たちと共闘して真剣勝負するための、これが狼煙となり起爆剤と化して、火花を散らしてくれる、それだけのインパクトのない興業なんて一文の価値もない。

いや、おそろくはしかし、そんなことだけでは、すませられないのかもしれない。かくも深みにまで深淵近くまで恩寵の時空は、人と人をも出逢わせる(註七)。

卑しくも芸術を名乗り、或いは気取るのであれば「底」なしでなければならぬ。奈落に落ちなければ醍醐味なんて味わえっこない奇跡的な、突然変異な衝突からのみ「本物」が生まれるのだから。

(作家。バンドマン)

註一 この二十歳の「天才」役者はチェルフィッチュによる所謂「静かなる演劇」にも出演したやに聞く。フェスティバル/トーキョーに何度か参画したことがあるのだが、その際に確か日韓共同だったか記憶定かでないが、岡田利規作を観たことがあり、流石に名に恥じず、知らず眠っちゃいそうになるのを必死で堪えた記憶はあり、といて必ずしも貶しているわけではない。意図はよく伝わったし、なるほどねと一種の「感心」も客としてはどうなんだろう。それだけではない。たくさん掛かってしまう大谷能生くんが主演したその、岡田利規演出の芝居がすぐ近所であったのに、完売してしまつて見に行けなかつた。だからその評価はいま置くことにしたい。

註二 そしてこの雨の夜、ひとりの使者がお使いみたいに来て、一枚の紙片を手渡ししたのはぼくにはなかつたが、すぐ傍にいたので、見るともなく聞くともなしに覗くまでもなく文言は読めた。築地、聖路加、1058号室古澤守(本名)。その翌日。首くくり拷象さん死去の訃報が流れた。芥正彦による草月でのヘリオカバルス劇で、舞台上にはセーラー服姿のスカート部と胸辺りとを縛られて逆さ吊りにされている女性が高くいて、比較的前めの席にいたぼくがふと見上げると、そこに首くくり拷象が吊られていた。公演後の打ち上げに、彼と少し話して名刺みたいなものを貰ったが、既にべろんべろんに酔つてて呂律も回らず、執拗ではないものの少なからずカランでくるのは結局話した相手がいなかつたんやろね。一期一会である。三五年ほど前に出た石井聰互監督「爆裂都市」ではギリヤーク尼ヶ崎と一緒だったし、四十年前になるけど東京都美術館で「ガセネタ」として対バンしたせいで遂には加藤好弘さんも本

SHAKUJISHORIN  
詩歌句集古書専門

tel 03(3995)7949  
★戦前の詩歌集雑誌高価買入  
★在庫カタログ発行  
石神井書林  
〒177-0041 東京都練馬区石神井町6-8-3

その当時、オーナーであった室伏鴻は文字通り欧州で暴れ回っていた。

註七 以前、白水社刊の『友川カズキ独白録・生きてるって言うてみる』の本紙書評でも触れた(2016年1月23日付・3239号)が、2015年11月17日に新宿L O F T でぼくが催した「SHINDACO死んだ子の輪だけは数えておかねばならない」なる祝祭的とも呪殺的ともつかないイベントに、友川カズキはお客さん(！)で来てくれ、一方この夜にはむろん、我れらが佐藤董も出演したのでここ数年「音楽には贅沢したい」と公言して憚らない芥正彦も現れ、まったくの偶然で、しかも数十年ぶりに、芥・友川の邂逅が、あきれたことに客席で果たされたのだ。いったいこの異業種二人の交友を想像できるほど超能力にはわたしは優れていないなんてのはどうだって良くて、以下は友川カズキの回想である。

註四 室伏鴻(むろぶし・こう)一九四七年東京生まれ。ダンサー・振付家。六九年土方巽に師事。七二年「大駱駝艦」創立、旗揚げに参加。七四年舞踏新聞「激しい季節」編集発行。欧州に日本の暗黒舞踏を認知させた。二〇一三年一月二日横浜赤レンガ倉庫にて「外」の千夜二夜の二つとして芥正彦と「二人アルト」を共演。

註五 二〇一五年六月八日メキシコ国際空港で心筋梗塞にて、ステージ上でのいつもの伐倒のフォームのまま急逝した。

註六 二〇一六年一〇月に室伏鴻の膨大な蔵書や資料の集められた早稲田鶴巻町に発足したアーカイブ・カフェS H Y。なお、因縁深いことに筆者(山崎)は一九八二年夏にその前身である青山S H Yを数日間借り切って、T Vに出る前の蛭子能収の原画展や「爆裂都市」直後の石井聰互、町田町蔵(康)、遠藤ミチロウ他などでへんてこなイベントを催したことがある。

茶園敏美 [著] もうひとつのセックスというコンタクト・ソープ 日本人が忘れた占領の裏面史。強姦、売春、恋愛、妊娠、出産、…圧倒的な権力の非対称のもとで「時代の生き延びた日本女性の生活何だったのか?」(推薦・上野千鶴子) 定價

大城貞俊 [著] カミちゃん、起きな生きるんだよ 沖縄戦と戦後の米軍基地拡張による民と歴史に翻弄されながらも希望を持ったカミちゃんの人生を、新鮮なかに描いた画期的作品【なんよう文庫】 定價

熊芳 ションファン [著] 林京子の文 戦争と核の時代を生 定價

役重善洋 [著] 近代日本の植民地: ジェンタイル・シオニスム 内村鑑三・矢内原忠雄・中田重治 ナショナリズムと世界認識— 定價

インパクト 東京都文京区本郷2-5-11 03-3818-7576 FAX 38 www.jca.apc.org/~

劉曉波伝 余傑著 劉燕子編 劉燕子・横澤泰夫訳 四六判並製509頁 本体2700円

1989年天安門事件、〇八憲章、ノーベル平和賞。度重なる拘束や監視にもかかわらず中国にとどまり続け、民主化を訴えた劉曉波とはどのような人間だったのか!? 最後まで彼と行動を共にした若手知識人作家による劉曉波の人生録。

1967 中国文化大革命 荒牧万佐行 写真集 B5判並製216頁 本体2500円 (1967年2月5日)、その一週間の歴史的瞬间を自撃した日本人報道カメラマンがいた! 半世紀前の人民中国——北京・上海・武漢・広州・深圳、文革初期の街の様子と人々のエネルギーを捉えた貴重な写真170点。12/24付毎日新聞読書欄で紹介。

集広舎 <価格税別> http://shukousha.com 812-0035 福岡市博多区中呉服町5-23 TEL092-271-3767 FAX092-272-2946

キム・ニューマンによる伝説のシリーズ 《ドラキュラ紀元》の完全版 刊行開始!

キム・ニューマン ドラキュラ紀元一八八八

女王と結婚し、大英帝国を手中に収めたドラキュラ。だが、人間とヴァンパイアが共存する社会は、ヴァンパイアの女だけを狙う。切り裂き魔の凶行に揺らぎました。 諜報員ボルガードは、 五百歳の美少女とともに切り裂き魔を追う—— 四六判576頁 税別3600円

海外の怪奇幻想小説の傑作を精選! ナイトランド叢書 第3期刊行中! 最新刊●E.F.ペンソン「見えるもの見えるもの」

●既刊 C.A.スミス W.H.ホジソン A.ブラックウッド プラム・ストーカー R.E.ハワード A.ターレス A.メリット 他

発行:アトリエサード 発売:書苑新社 新宿区高田馬場1-21-24-301 Tel.03-5272-5037 詳細・通販は、アトリエサード www.a-third.com

源氏物語 煌めくつとばの世界II 原岡文子・河添房江編 ●9800円+税 女性研究者37人による「源氏物語」、煌めくことばの森への挑戦 第二弾

青島麻子/池田節子/今井久代/鶴飼祐江/太田敦子/大津直子/勝亦志織/川名淳子/木谷眞理子/久宮木原玲/倉持長子/栗本眞世子/斉藤昭子/清水婦久子/スエナガエウニセ/鈴木宏子/鈴木泰恵/相馬知奈/高木和子/高橋麻織/中川正美/長瀬由美/西本香子/橋本ゆかり/畑恵里子/林悠子/平林優子/堀江マサ子/松本美耶/三村友希/本橋裕美/山本淳子/湯浅幸代/古井美弥子/吉野瑞恵

定家のもたらしたもの 日本女子大学 日本文学科編 ●3000円+税 3つのテーマからアプローチする ◆継承と変容 ◆文字と仮名遣い ◆定家の築いた「古典」とは

翰林書房 〒151-0071 渋谷区本町1-4-16 初台ガイアビル4F ☎03-6276-0633 FAX03-6276-0634 http://www.kanrin.co.jp/

開山堂出版 アミターバ坂口安吾 第一部 風と光と波の幻想 鳥居哲男

これが本場の坂口安吾だ! このよきな「評伝」の形が、これまでにあっただろうか。奇想天外というべきか。死後、無量光寿「アミターバ」となった安吾が著者とともに、時空を超えて全国を駆け巡る追慕のノンフィクション・ドキュメントドラマを展開する。想像を絶するほどの面白い評伝。雑誌連載中から話題騒然! 新書・二二〇〇円(税別)

金子光晴門下の鬼才が放つ! わが遺言詩集 竹川弘太郎

現代詩の世界に一石を投ずる! 名作「春の葬送」で、いましきの「詩の世界」に訣別した詩人・竹川弘太郎が万感の思いを込めて放つ「蘇生」の詩と、師・金子光晴に捧げる渾身のオマージュ。他に代表作、訳詩、そして詩を志す人々に贈るメッセージを収録した42年ぶり待望の新詩集。ここに完成! 四六判・三三〇〇円(税別)

〒164-0001 東京都中野区中野4-15-9-1008 電話03-3389-5469 FAX03-3389-5624